

小中連携の観点からみる体育・保健体育科の指導について
— 運動領域の運動特性と系統性を踏まえて —

笠原真綾・加藤純一

A Study of Education in Cooperation between Elementary School
and Junior High School in Physical Education
— Based on Activity Characteristics and System of Sport Competence —

KASAHARA Maaya · KATO Junichi

小中連携の観点からみる体育・保健体育科の指導について

— 運動領域の運動特性と系統性を踏まえて —

笠原真綾¹⁾・加藤純一²⁾

要旨：平成28年から、9年間の義務教育を一貫して行う小中一貫教育の制度が開始し、それに伴い義務教育学校が創設された。当時、小学校から中学校への接続が円滑なものになっていないことが指摘され、それは「中1ギャップ」という言葉に象徴されていた。文部科学省はその改善を図るために、本制度の導入を図ったとされている。ところで、小中連携・一貫教育の取組においては、小・中学校の教職員が児童・生徒の9年間の学びを理解し、その上で学習指導を行うことが望まれている。これは全ての教科において当てはまり、体育・保健体育科においても例外ではない。しかし、体育・保健体育科においては校種間でその習得状況に差がみられ、運動技能の定着が進みづらい状況にあることが指摘されている。そこで、本研究では、体育・保健体育科における各運動領域の運動技能的側面に着目し、それらの系統性を図式化することで学びの体系化を示し、系統立てた指導のあり方について言及した。

キーワード：体育・保健体育科 系統性 小中連携 小中一貫 運動領域

1. はじめに

平成27年に学校教育法が一部改正された。それにより、平成28年からは9年間の義務教育を一貫して行う「義務教育学校」が創設され、小中一貫教育の制度が施行されることとなった¹⁶⁾。

文部科学省(2012)「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理」¹⁷⁾では、児童が小学校から中学校への進学に際して、新しい環境での学習や生活への不適應による不登校増加、所謂中1ギャップが指摘され、その原因の一つとして、小学校から中学校に進学する際の接続が円滑でないことを挙げられている。このことの解決の施策として、文部科学省は小中一貫教育制度を導入することで、接続の円滑を図ろうとしたと見做せる。

ところで、周知のように小中連携と小中一貫教育とは異なる概念である。文部科学省(2012)「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理」¹⁷⁾では、小中連携を「小・中学校が互いに情報交換、交流することを通じて、小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指す様々な教育」とし、小中一貫教育を「小中連携のうち、小・中学校が9

年間を通じた教育課程を編成し、それに基づき行う系統的な教育」としている。つまり、小中一貫教育は小中連携の一形態として位置付けられているということになる。また、小中連携、小中一貫教育の共通の目的としては、小・中学校の教職員が9年間の教育活動を理解した上で、全体の教育活動において自分の果たすべき役割をしっかりと認識することで、9年間の系統性を確保し、義務教育の目的、目標に掲げる資質能力、態度等をよりよく養えるようにしていくこと¹⁷⁾となる。したがって、小中連携、小中一貫教育のどちらの取組であっても、小・中学校の教職員が9年間の系統性について理解し、指導していくことが求められていることは言を俟たない。

このような小中連携、小中一貫教育の在り方は全ての教科において当てはまり、体育・保健体育科も例外とはならない。体育・保健体育科の指導について平川(2013)¹²⁾は、体育科独自の価値は運動技能を身に付けることであるとし、運動感覚・技能を伸ばす授業が望まれると指摘している。また、杉原(2003)⁶⁾は、子どもたちの運動の好き嫌いは、運動ができる・できないといった「能力」

1) 皇學館大学大学院教育学研究科大学院生 2) 皇學館大学教育学部

が要因として関わることを指摘している。更に、高橋ら(2010)⁸⁾は、子どもが体育授業に最も期待することは運動技能の習得及び習熟であり、運動の楽しさや喜びを深める要件として、技能の向上を合理的に図ることを挙げている。加藤(2015)³⁾は、小中の学習内容を整理し、体育・保健体育科における技などのつながりを系統図として示し、技能面の習熟に着目した系統的な学習の必要性を指摘している。以上より、体育・保健体育科において小中連携を考えるに際しては、技能面の習熟について考察を深める必要があると筆者はみている。

しかし、長谷川(2017)¹¹⁾が指摘しているように、中学校保健体育科では生徒の体力低下が授業の困難さを引き起こしていること、三輪ら(2017)¹³⁾の、生徒の技能習得不足が要因となり中学校で求められる内容の授業が行えない状況にあること等から、中学校では小学校段階における技能習得の未熟さにより運動技能の定着が進みづらい状況にあることが窺える。また、四方田(2022)²⁰⁾の小学校教員は学習内容、指導内容が不明確になりやすいといった課題があり、学習の積み重ねができていない教員が多いこと、石塚ら(2021)¹⁾の、小・中教員で相手校種の内容を把握している割合が、小学校教員で2割以下、中学校教員で2~3割程度であったこと等の指摘も見逃せない。よって、小学校から中学校までの学びが各校種や学年でどのように展開されていくのかを示すことは、今後の体育・保健体育科の小中連携・一貫教育を進めていくに際し有用であるものと推察される。

そこで、本稿では小学校学習指導要領解説体育編(以下では、「小学校解説」と示す)及び、中学校学習指導要領解説保健体育編(以下では、「中学校解説」と示す)にみられる各運動領域の運動技能面に着目し、各運動領域における学習の系統性を明らかにしようと考えた次第である。

2. 「学習指導要領」にみる、運動領域の特性及び系統性

小・中学校における運動の系統性を考察するにあたり「小学校解説」を繙くと、当該学年で身に

付けておきたい力とし、「基本的な動き」「基本的な技能」「基本的な技」の表記が見られる。また、「中学校解説」では、特に武道領域において「基本動作」「基本となる技」という表記が見られる。この表記箇所は、各運動領域や学年により異なる。そこで、まず、これらの言葉の意味するところを確認することとした。なお、これらの表記が用いられている運動領域は次の通りである。

- ・基本的な動き：器械運動系、陸上運動系、水泳運動系
- ・基本的な技能：器械運動系、陸上運動系、水泳運動系
- ・基本的な技：器械運動系
- ・基本動作：武道系
- ・基本となる技：武道系

2-1. 「基本的な動き」について

「小学校解説」の「各学年の目標及び内容〔第1学年及び第2学年〕」には、「基本的な動きを身に付けるようにするとは、各種の運動遊びにおいて習得が期待される、運動種目として成立する以前の基本的な動きを身に付けることを示している」とある。よって、「基本的な動き」とは、学習指導要領に示される各運動領域において、それぞれの運動種目が成立するために必要とされる身体の動きと理解することができよう。

2-2. 「基本的な技能」について

「小学校解説」の「各学年の目標及び内容〔第5学年及び第6学年〕」には、「各種の運動の特性に応じた基本的な技能を身に付けるようにするとは、各種の運動の基本となる技能を、それぞれの運動の特性に応じて身に付けることを示している」とある。この「技能」については、高橋ら(2010)⁸⁾が「運動技能とは、練習やトレーニングを行うことでもたらされる、技術が身についた状態、あるいはその技術を用いて運動を遂行することのできる能力のことである」としていることから、この「基本的な技能」とは、運動技術を用いて運動を遂行することができ、各種運動の基本となる能力と理解することができよう。

2-3. 「基本的な技」について

「小学校解説」には、「基本的な技とは、類似する技のグループの中で、最も初歩的で易しい技でありながら、グループの技に共通する技術的な課題をもって、当該学年で身に付けておきたい技のことである」とある。これより「基本的な技」とは、類似するグループの中で最も初歩的で易しく、グループの中に共通する技術的な課題を持ち、当該学年で身に付けておきたい、あるまとまりを有する動きと理解することができよう。

2-4. 「基本動作」について

「中学校解説」では、柔道、剣道、相撲のそれぞれにおいて「基本動作」が例示されている。そこには、各種の特有の構えや組み方、体の移動のさせ方が見られる。また、武道では、基本動作や基本的な技を用いて簡易な攻防を展開することが求められている。以上より「基本動作」とは、武道における攻防を成立させるために必要となる、構えや組み方、体の移動のさせ方などの動きと理解できよう。

なお、この「基本動作」という表記は、「学習指導要領解説」ではこの武道領域にのみ用いられているが、他の運動領域にも基本となる動作はあるものと推察する。しかし、本稿で「基本動作」とする場合は、武道での固有な動きとすることとした。

2-5. 「基本となる技」について

「中学校解説」には、柔道、剣道、相撲のそれぞれで、各種目の技の名称とともに、それらが比較的安定して(剣道の場合は、比較的容易に)行える技と説明されている。この技について湯浅(1983)¹⁹⁾は、武道における技とは、「相手を打突したり制したりするという運動課題に対して合理性を持つ最小単位の、あるまとまりを持った運動」としていることから、この「基本となる技」とは、運動課題に対して合理性を持つ最小単位の、まとまりを持ち、比較的安定して、あるいは容易に行える動きと理解することができよう。

3. 各運動領域の特性及び系統性

ここでは、「小学校解説」及び「中学校解説」に記載されている各運動領域の運動特性と当該学年で習得すべき技能が、小学校から中学校へどのように展開していくかを考察することにする。その展開の仕方は矢印を用いて示した。武道領域は中学校初出のため、中学校で学習する展開のみを示した。

なお、系統図は、「小学校解説」及び「中学校解説」で学年間、校種間での接続が記載されている箇所を基に作成したが、運動領域によっては未表記のものもあるため、その際は「知識及び技能」から補い、太字で示した。

3-1. 各運動領域の特性及び系統図

ここでは、各運動領域の特性並びに動きや学びの系統性を示した。

3-1-1. 体づくり運動 (図1, 図2)

体づくり運動は、小学校低学年では「体づくりの運動遊び」、中学年及び高学年では「体づくり運動」となり、低学年及び中学年では「体ほぐしの運動(遊び)」及び「多様な動きをつくる運動(遊び)」、高学年では「体ほぐしの運動」及び「体の動きを高める運動」で構成されている。中学校の「体づくり運動」では、先の高学年の構成が継続され、第3学年では「体の動きを高める運動」から「実生活に生かす運動の計画」に移り変わる。

3-1-2. 器械運動系 (図3, 図4)

器械運動系は、小学校低学年では、「器械・器具を使った運動遊び」、小学校中学年及び高学年では「器械運動」となり、低学年では「固定施設を使った運動遊び」及び「マットを使った運動遊び」、「跳び箱を使った運動遊び」、「鉄棒を使った運動遊び」で、中学年及び高学年では「マット運動」「鉄棒運動」「跳び箱運動」で構成されている。なお、中学校の「器械運動」では「平均台運動」が加わる。

「体ほぐしの運動（遊び）」に関わる記述	「多様な動きをつくる運動(遊び)」及び「体の動きを高める運動」, 「実生活に生かす運動の計画」に関わる記述
<p>小学校</p> <p>(低) 体を動かす楽しさや心地よさを味わう</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>(中) 体を動かす楽しさや心地よさを味わう</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>(高) 運動の楽しさや喜びを味わう</p> <p style="text-align: center;">↓</p>	<p>(低) 伸び伸びと体を動かしながら, 様々な基本的な体の動きを身に付けることが主なねらい</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>(中) 低学年で学習した様々な基本的な体の動きに加え, 更に多様な動きを身に付ける, 動きの質を高める</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>(高) 中学年までに身に付けた体の基本的な動きを基に, 体の様々な動きを高める</p> <p style="text-align: center;">↓</p>
<p>中学校</p> <p>自他の心と体に向き合い, 体を動かす楽しさや心地よさを味わい, 心と体をほぐす</p>	<p>体の動きを高める方法を学ぶことができる</p>

図1 運動特性

「体ほぐしの運動（遊び）」に関わる記述	「多様な動きをつくる運動(遊び)」及び「体の動きを高める運動」, 「実生活に生かす運動の計画」に関わる記述
<p>小学校</p> <p>(低) 自己の心と体の状態に気づく + みんなで関わり合う</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>(中) 自己の心と体の状態に気づく + みんなで関わり合う</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>(高) 自己や仲間の心と体との関係に気づく + 仲間と関わり合う</p>	<p>(低) 様々な基本的な体の動きを経験し, 動きの幅を広げる</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>(中) 体のバランス, 体の移動, 用具の操作, 力試しの様々な運動, それらを組み合わせた動きを身に付ける + 基本的な体の動きの幅を更に広げる + 動きの質を高める</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>(高) 体の柔らかさ, 巧みな動き, 力強い動き, 動きを持続する能力を高める</p> <p style="text-align: center;">↓</p>
<p>中学校</p> <p>(第1及び第2) 心と体の関係や心身の状態に気付く + 仲間と積極的に関わり合う</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>(第3) 心と体は互いに影響し変化することや, 心身の状態に気付く + 仲間と自主的に関わり合う</p>	<p>(第1及び第2) 目的に適した運動を身に付け, 組み合わせることができる</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>(第3) 健康の保持増進や体力の向上を目指し, 目的に適した運動の計画を立て取り組む</p>

図2 系統性

3-1-3. 陸上運動系 (図5, 図6)

陸上運動系は, 低・中学年では「走・跳の運動(遊び)」, 高学年では「陸上運動」となり, 低・中学年は「走の運動(遊び)」及び「跳の運動(遊び)」で, 高学年は「短距離走・リレー」及び「ハー

ドル走」, 「走り幅跳び」, 「走り高跳び」で構成される。中学校では「陸上競技」となり, 先の高学年の構成に「長距離走」が加わる。「小学校解説」では, 低学年でも「リレー遊び」の例示がある。しかし, 実際に「知識及び技能」としてリレーの

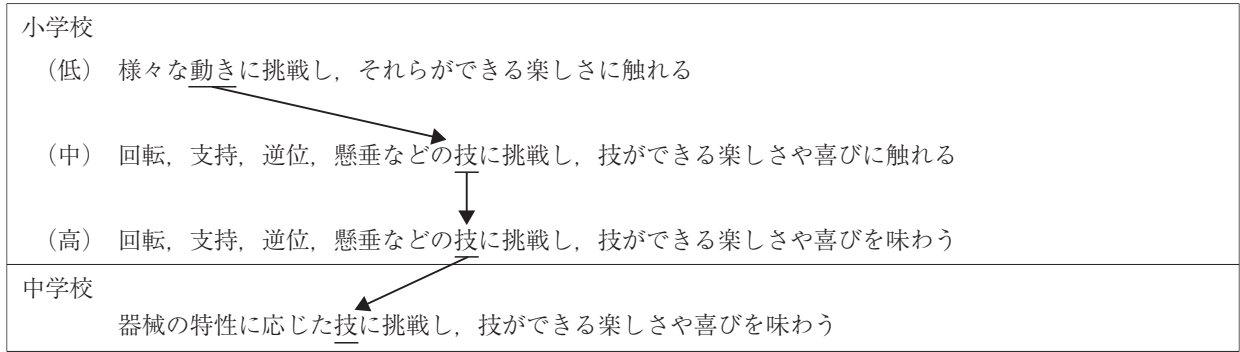


図3 運動特性

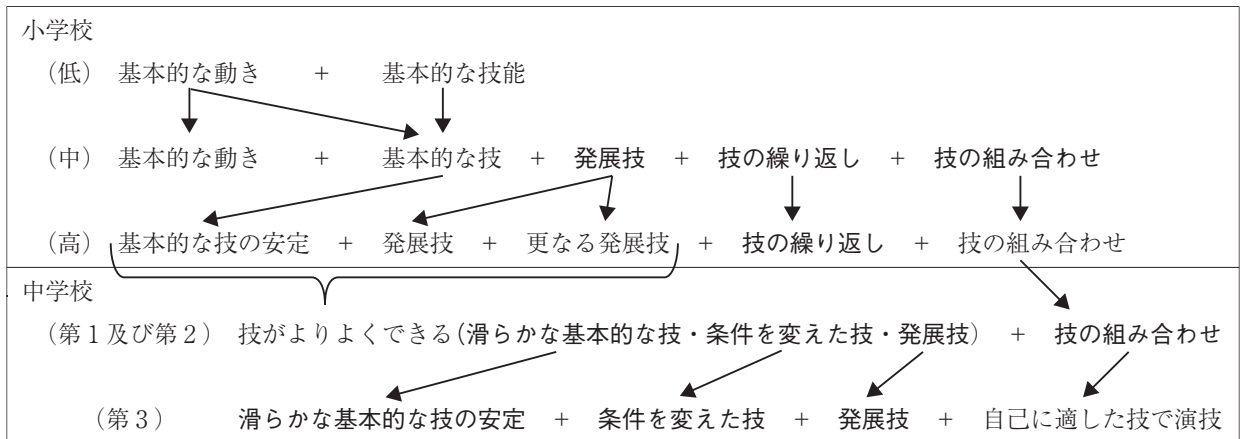


図4 系統性

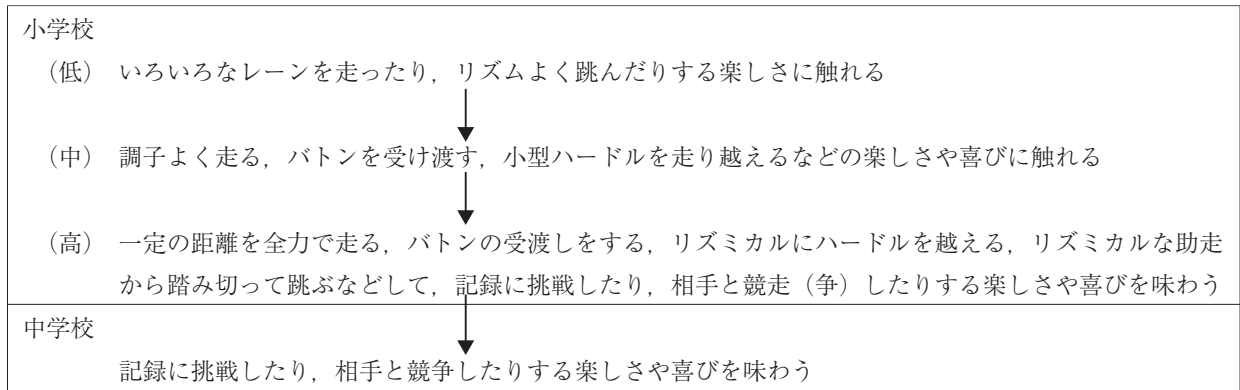


図5 運動特性

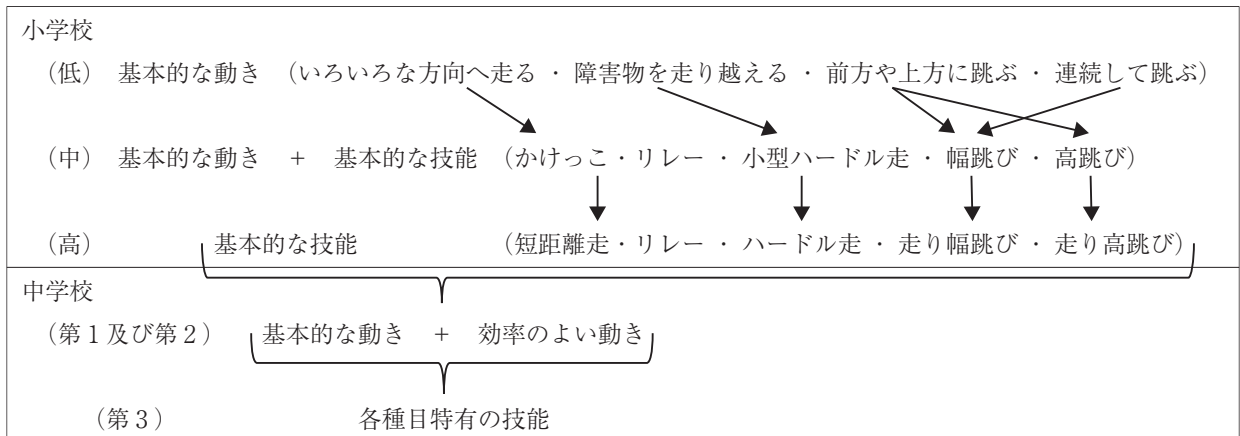


図6 系統性

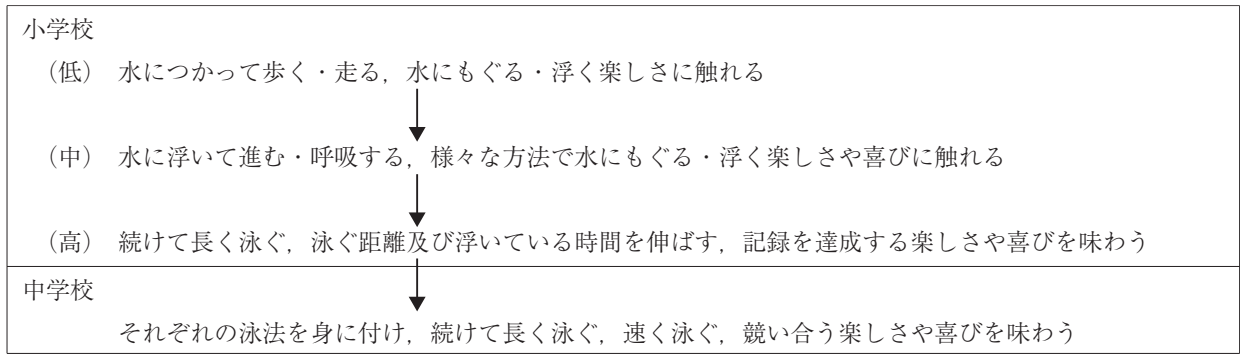


図7 運動特性

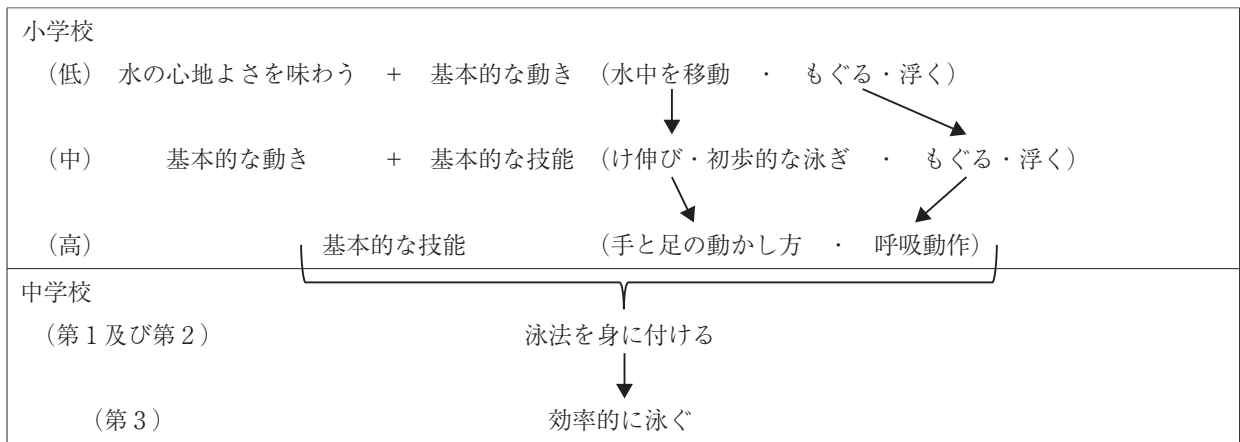


図8 系統性

バトンパスが求められるようになるのは、中学年からである。図5及び図6でリレーに関わる表記が中学年から始まるのはそのためである。

「ボール運動」は「ゴール型」及び「ネット型」, 「ベースボール型」で構成される。中学校は「球技」となり、その構成は高学年と同様である。

3-1-4. 水泳運動系 (図7, 図8)

水泳運動系は、低学年では「水遊び」, 中学年及び高学年では「水泳運動」となり、低学年は「水の中を移動する運動遊び」及び「もぐる・浮く運動遊び」で、中学年は「浮いて進む運動」及び「もぐる・浮く運動」で、高学年は「クロール」及び「平泳ぎ」, 「安全確保につながる運動」で構成されている。なお、中学校の「水泳」では「安全確保につながる運動」は行われず、「背泳ぎ」及び「バタフライ」が加わる。

3-1-6. 武道系 (図11, 図12)

武道系は小学校にはなく、中学校初出の運動領域である。その内容は「柔道」及び「剣道」, 「相撲」で構成されている。

3-1-5. ボール運動系 (図9, 図10)

ボール運動系は、低学年及び中学年では「ゲーム」, 高学年では「ボール運動」となり、低学年「ゲーム」は「ボールゲーム」及び「鬼遊び」で、中学年「ゲーム」は「ゴール型ゲーム」及び「ネット型ゲーム」, 「ベースボール型ゲーム」で、高学年

3-1-7. 表現運動系 (図13, 図14)

表現運動系は、低学年では「表現リズム遊び」, 中学年及び高学年では「表現運動」となり、低学年は「表現遊び」及び「リズム遊び」, 中学年は「表現」及び「リズムダンス」, 高学年は「表現」及び「フォークダンス」で構成されている。なお、中学校では「ダンス」となり、「創作ダンス」及び「フォークダンス」, 「現代的なリズムのダンス」で構成されている。

ところで、表現運動系では、高学年での学びの接続に関わる記述が「低学年の『表現リズム遊び』と中学年の『表現運動』の学習で身に付けてきた

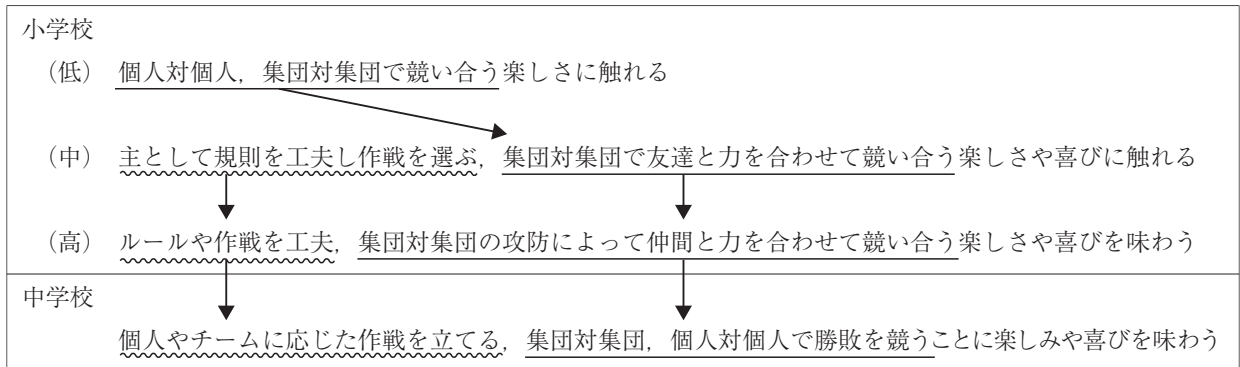


図9 運動特性

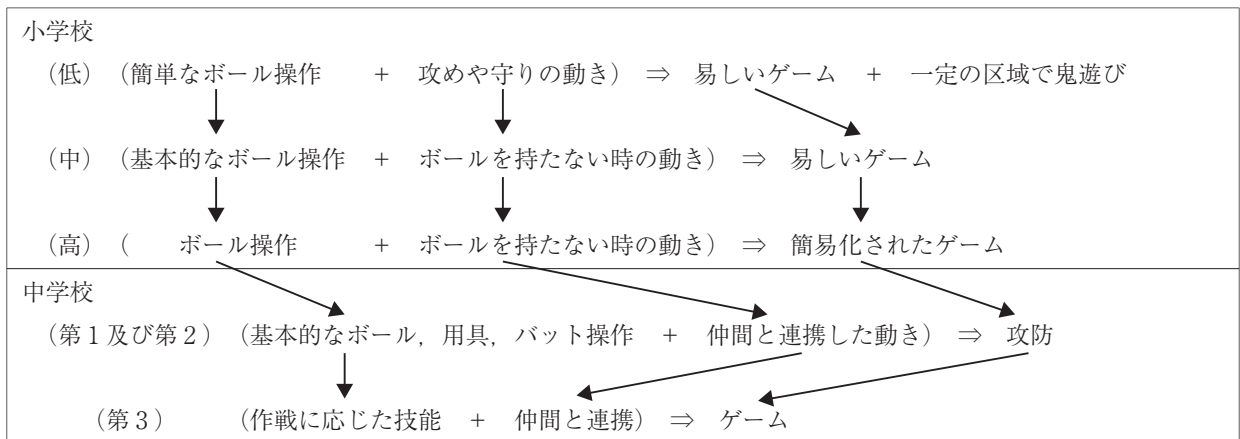


図10 系統性

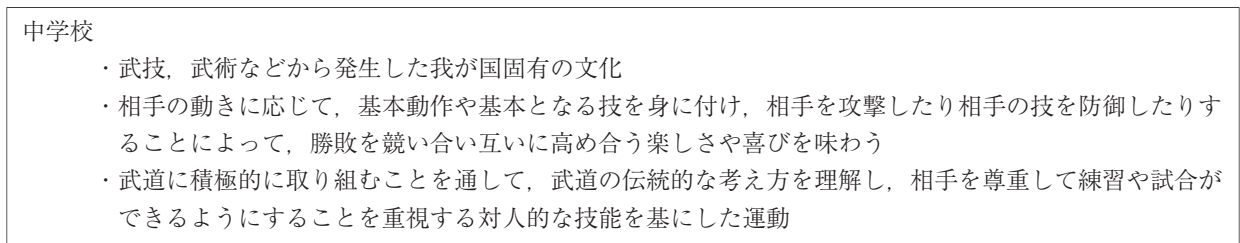


図11 運動特性

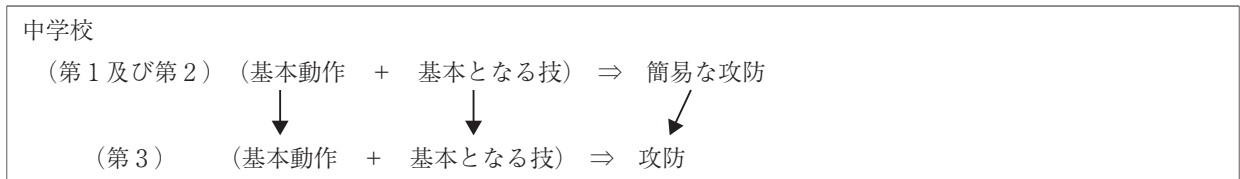


図12 系統性

即興的に表現する能力やリズムに乗って踊る能力, コミュニケーション能力などを土台として『表現』では(中略)踊る力を培うとともに, 『フォークダンス』では(中略)踊りで交流する力を培い, 中学校のダンスにつなげていくことが求められる。」と記されており, 他の運動領域とは異なった特徴を持つことがわかる。このことは, 低学年及び中学年での「即興的に表現する能力」及び「リ

ズムに乗って踊る能力」, 「コミュニケーション能力」が, その後のダンスの習得に重要視されることによるものと推測される。そこで, 表現運動系では他領域のまとめかたと異にし, 「小学校解説」及び「中学校解説」の「知識及び技能」の部分より各種ダンスでの系統性をまとめて示すこととした。

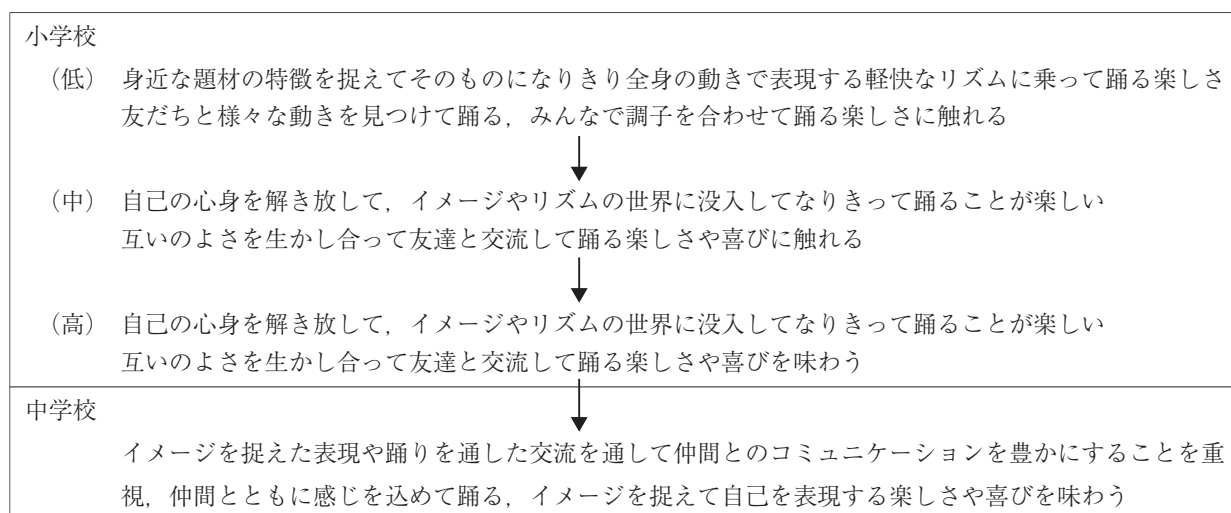


図13 運動特性

3-2. 小・中学校の運動特性と系統性

ここでは前項で作成した図を基に, その運動特性を踏まえながら小学校から中学校への系統性について考察してみたい。

3-2-1. 体づくり運動系

体づくり運動領域では, 他の運動領域とは異なり, 「知識及び運動」と表記されている。「小学校解説」には体づくり運動領域のそれぞれの運動のねらいとして, 「体ほぐしの運動(遊び)」は「心と体の変化や心と体の関係に気付いたり, みんなで関り合ったりすることが主なねらい」と記されており, 「多様な動きをつくる運動(遊び)」及び「体の動きを高めるための運動」は「体の様々な動きを身に付けたり高めたりすることが主なねらいであり, それぞれが特定の技能を示すものではない」とある。よって, 他の運動領域のように特定の技能や技の習得を目指すということが学習のねらいとならないことに留意する必要がある。

ところで, 「体ほぐしの運動(遊び)」については, 主なねらいが「心と体の関係に気付くこと」及び「仲間と関わり合うこと」となり, 小学校低学年から中学校第3学年まで一貫している一方で, 「多様な動きをつくる運動遊び」及び「体の動きを高めるための運動」, 「実生活に生かす運動の計画」では学年進行と共に求められる内容が変化していく。系統的に見ていくと, 低学年での「多様な動きをつくる運動遊び」では, 様々な動きを経験し

動きの幅を広げることが求められ, 中学年での「多様な動きをつくる運動」では, 低学年での動きの質の向上と更なる多様な動きを身に付けることが求められる。小学校高学年, 中学校第1学年及び第2学年での「体の動きを高めるための運動」では, 小学校中学年までの学習を踏まえた上でねらいに応じて直接的に体力を高めるような運動に取り組むことが求められる。そして, 中学校第3学年の「実生活に生かす運動の計画」では, 健康の保持増進や体力の向上を目指しながら自分の目的に応じた計画を立てて取り組むことが求められる。

以上のところを詳述すると, 次のようになる。即ち, 低学年・中学年での「多様な動きをつくる運動(遊び)」では, 様々な基本的な体の動きを身に付け, 動きの幅を広げたり質を高めたりすることがねらいとされている。「小学校解説」にも, 「低・中学年においては, 発達の段階から体力を高めることを学習の直接の目的とすることは難しいが, 将来の体力の向上につなげていくためには, この時期に様々な動きを培っておくことが重要である」とあることから明らかなように, まずは様々な体の動きを経験し, 動きの幅を広げていくというように段階的に指導を行っていくことが重要となろう。

一方で, 小学校高学年の「体の動きを高めるための運動」の説明には, 「ねらいに応じて(中略)運動すること」とあり, このねらいとされる運動が「体の柔らかさ」「巧みな動き」「力強い動き」

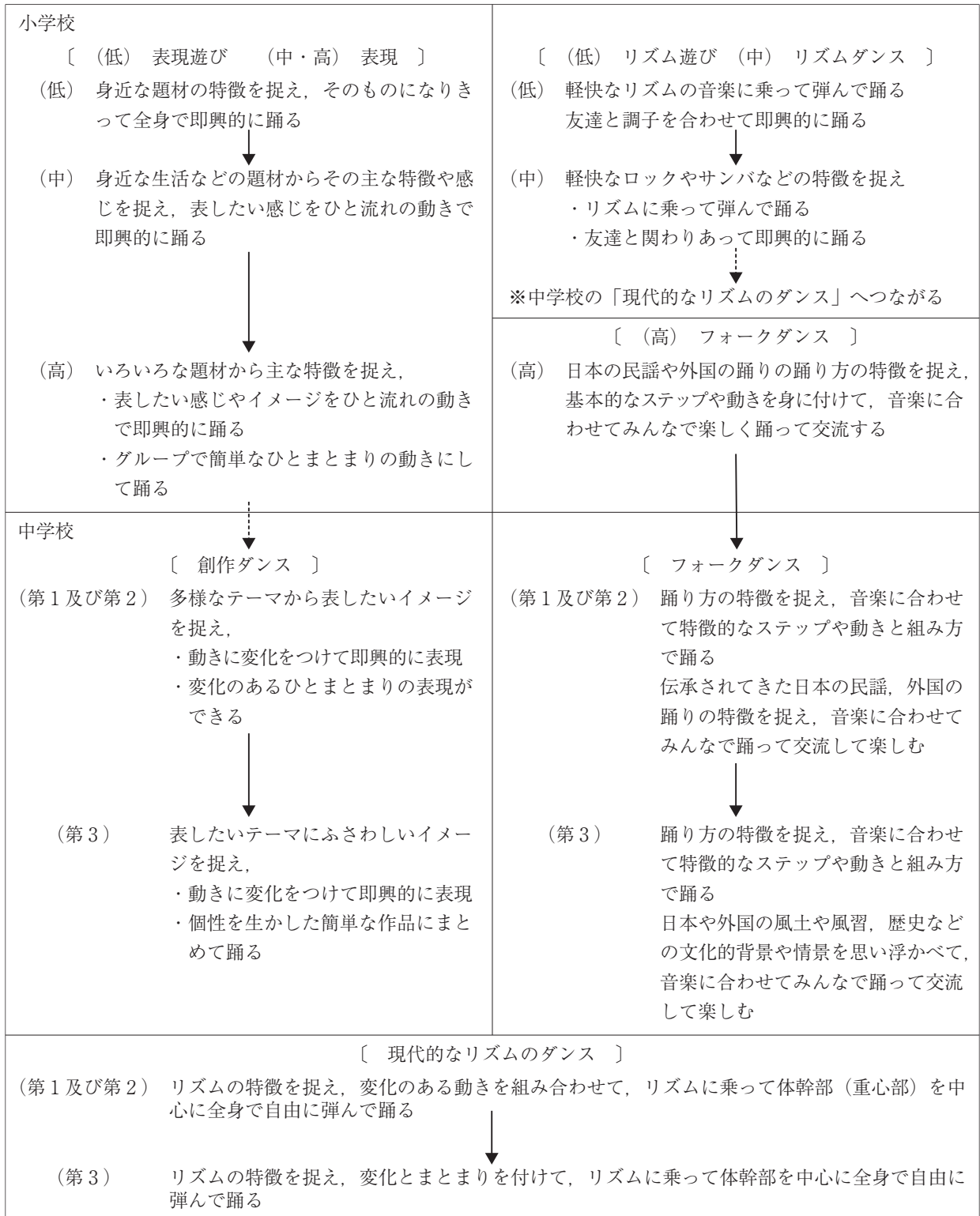


図14 系統性

「体の動きを持続する能力」であることが示されている。「小学校解説」の「各領域の内容」には、「学んだことを授業以外でも生かすことができるようにすること」とあり、「児童が自己に適した課題を持って積極的に取り組む」ことが目指されている背景には、次のステージの中学校での「実

生活に生かす運動の計画」が念頭に置かれていることと推察される。

このように見えてくると、小学校高学年の「体の動きを高めるための運動」は中学校で学ぶ礎として、低・中学年の「多様な動きを高めるための運動(遊び)」は高学年の「体の動きを高めるための

運動」の礎として位置付けられており、多様な動きの獲得から体の動きの向上、そしてそれを自己の目的に適した形で実行できるようになる、といった系統性を確認することができる。

なお、体づくり運動領域では、後述する他の運動領域において小学校から中学校への学びの接続という観点から考えた時に、体づくり運動領域では是非取り上げておきたい運動(平均台を用いた運動やかかけ足、持久走など)がいくつかある。このように体づくり運動領域では、授業以外や実生活で生かすことのできる運動に加えて、他の運動領域にも応用することができるような運動が例示されていることにも留意しておきたい。

3-2-2. 器械運動系

器械運動系では運動特性に共通して、「動き(技)に挑戦し、それら(技)ができる楽しさや喜びに触れる運動である」とあり、小・中学校を通して動きや技の習得が主な学習活動となる。系統的に見ていくと、低学年での「器械・器具を使った運動遊び」で様々な動きを経験し、基本的な動きや技能を身に付けることが求められ、その後中学年で、「基本的な動き」と「基本的な技」を身に付けること、さらに高学年で基本的な技の安定、発展技、技の組み合わせが求められ、中学校第1学年及び第2学年では技がよりよくできること、中学校第3学年で、自己に適した技で演技することが求められていることがわかる。

以上のような系統を詳解すると、次のようになる。即ち、小学校低学年では、器械運動に関わる様々な動きを通して、基本的な動き及び技能を身に付けることがねらいとされている。それは「小学校解説」の「各領域の内容」に「『固定施設を使った運動遊び』、『マットを使った運動遊び』、『鉄棒を使った運動遊び』及び『跳び箱を使った運動遊び』で経験して身に付けた体の動かし方や運動感覚を、中・高学年の『マット運動』、『鉄棒運動』及び『跳び箱運動』の技の学習に生かすように学習過程を進めることが大切である」とあることから明らかなることである。様々な動きの中で体の動かし方や運動感覚を身に付けさせることが第一義にあり、そこで身に付けた感覚がその後の学

習の礎になるものと推察される。

一方で、中学年からは技の習得及び組み合わせ(演技)がねらいとなる。中学年では、低学年から引き続き「基本的な動き」に「基本的な技」が加わる。また、中学年での「運動が苦手な児童への配慮の例」には、主に基本的な技が苦手な児童に対しては、場の工夫とともに、低学年での運動遊びに取り組み、それぞれの技に必要な動きを身に付けるようにさせることが記されている。ここに、中学年では主に「基本的な技」の習得を核としつつ、必要に応じて低学年での基礎感覚作りのフィードバックが求められていることが分かる。また、「小学校解説」には、技の組み合わせについては中学年より見られるが、「基本的な技に十分に取組んだ上で、それらの発展技に取り組みたり、技を繰り返したり組み合わせたりすること」とあることから、中学年では基本的な技をより確実に定着させることに重きが置かれていると見てよからう。

高学年では、基本的な技の安定、発展技など技の習得に加えて、技の組み合わせが求められる。中学校第1学年及び第2学年では、小学校での基本的な技をよりよく行うこと、技を組み合わせることが求められ、第3学年では、技の発展に加えて自己に適した技での演技が求められる。これらのことから、技の学習については、中学年では基本的な技の確実な定着、高学年以降は技のレベルアップ及び組み合わせ(演技)が求められ、低学年の基礎感覚作りから段階的に指導を行うことが重要とならう。

なお、中学校の器械運動では平均台運動が取り上げられる。小学校での器械運動系における平均台の取り扱いについては、低学年で「固定施設を使った運動遊び」の中で「平均台を使った運動遊び」が例示され、体づくり運動に「多様な動きをつくる運動」及び「体力を高めるための運動」において平均台を用いた運動が例示されている。これらに鑑みると、中学校での学習を考慮すれば系統学習的には小学校低学年で平均台を使用した基礎感覚を意図的に学習させる必要があると言えよう。

3-2-3. 陸上運動系

陸上運動系は、全運動領域の中で唯一、小学校低・中・高学年・中学校で領域名が異なる。低学年は「走・跳の運動遊び」で、いろいろな方向へ走る、障害物を走り越える、上方や前方に跳ぶ、連続して跳ぶなどの様々な動きの中で、走る、跳ぶといった陸上運動に必要な「基本的な動き」を身に付けることが求められる。中学年は「走・跳の運動」となり、「かけっこ・リレー」「小型ハードル走」「幅跳び」「高跳び」と細分化され始め、それぞれの「基本的な動き」や「基本的な技能」の獲得が求められる。高学年は、「陸上運動」で、「短距離走・リレー」「ハードル走」「走り幅跳び」「走り高跳び」で構成され、中学年で身に付けた「基本的な動き」や「基本的な技能」を発展させることになる。一方、中学校では陸上競技となり、高学年の構成に新たに長距離走が加わる。中学校では、第1学年及び第2学年で「基本的な動き」及び「効率的な動き」が求められ、小学校で身に付けた技能の質的な発展が目指される。第3学年では、「各種目特有の技能」となり、陸上競技のより専門的な動きを習得することになる。

運動特性(図5)を概観すると、低学年及び中学年で「走・跳の運動(遊び)」では、走ったり跳んだりすることそのものの楽しさや喜びに触れる運動(遊び)であることがわかる。高学年では、中学年までのような運動そのものの楽しさではなく、身に付けた技能を生かして記録の更新や競走(争)を楽しむ運動へと移行する。中学校では、高学年と同様に「記録に挑戦したり、相手と競争したりする楽しさや喜びを味わう運動である」とあり、そこに変化は見られない。

以上のことより、陸上運動系においては低学年・中学年では様々な動きや運動を通して、走ったり跳んだりする「基本的な動き」や「基本的な技能」を身に付けるとともに、その運動自体の面白さや心地よさを味わわせることが重要となり、高学年からはそれらの技能を発展させるとともに、記録の向上を目指したり、競走(争)したりすることの楽しさを味わわせることになる。

なお、中学校から新たに「長距離走」が加わるので、このことについて付言しておきたい。小学

校では、長距離走に直接的につながるような運動は陸上運動系には存在しない。小学校では、高学年の体づくり運動の「体の動きを高める運動」の中の「動きを持続する能力を高めるための運動」に「無理のない速さで5~6分程度の持久走をすること」とあり、小学校低学年及び中学年においては、体づくり運動の「多様な動きをつくる運動(遊び)」の「体を移動する運動(遊び)」の中に「無理のない速さでかけ足を3~4分程度続けること(低学年では、2~3分)」とある。これらの持久走やかけ足のねらいとしては、低学年・中学年では「体を移動する動きを身に付ける」ことであり、高学年では「動きを持続する能力を高める」ことである。したがって、中学校での「長距離走」とは明らかにねらいが異なり、直接結びつくような学習形態であるとは言えない。中学校での「長距離走」は陸上競技に属することから、他の競技種目と同様にタイムの短縮や競走が求められる。このような背景、すなわち持久走を競争的に取り扱うことが、子どもたちに長距離走が嫌われる要因であると窪田ら(2009)⁵⁾は指摘している。小学校では、走ったり跳んだりする運動そのものの楽しさを体感させる段階から徐々に競争やタイムの短縮をねらいとした「陸上運動」への転換が図られるが、この「長距離走」においては中学校から、いきなりタイムの短縮や競走が求められることになり、このような構図が「長距離走」を嫌いになる要因となると推察される。中学校で「長距離走」を扱う際には、小学校の体づくり運動で行われる「かけ足」「持久走」などの要素を取り入れ、長い距離を走ることそのものの楽しさが体感できるようになってから、競争的要素を取り入れた授業展開にしていく必要があると言えよう。

3-2-4. 水泳運動系

水泳運動系での学習内容を系統的に見ていくと、低学年の「水遊び」及び中学年で「水泳運動」では、水の中を進むことや、水に浮く・もぐることが求められ、高学年の「水泳運動」では、「クロール」「平泳ぎ」の所謂泳法の習得、及び「安全確保につながる運動」が求められる。中学校では「背泳ぎ」「バタフライ」を加えた更なる泳法

の習得と、それらの効率的な泳ぎが求められる。つまり、小学校低学年及び中学年では泳法習得の前段階となる運動学習が中心となり、さらには小学校高学年及び中学校では主に泳法学習が中心となり、中学校では加えて泳ぎの効率性が求められるということになる。

さて、低学年の「水遊び」では、水につかっての遊びやいろいろな姿勢でもぐったりすることを通して水に慣れることが求められる。中学年では、低学年での「水の中を移動する遊び」から「浮いて進む運動」へと変化する。つまり、中学年では浮いた状態で進むことが求められ、高学年から学習する泳法の初期段階として位置付けることができる。低・中学年での「もぐる・浮く運動(遊び)」は、「小学校解説」で例示されている活動内容は異なるものの、基本的なねらいとしては「息を止めたり吐いたりしながら」もぐる・浮く運動を行うことは共通している。

「小学校解説」の「各領域の内容」には、「水泳運動は(中略)、安定した呼吸を伴うことで、心地よく泳いだり、泳ぐ距離や浮いている時間を伸ばしたり、記録を達成したりすることにつながり、楽しさや喜びに触れたり味わったりすることができる運動である。そのためには、水遊びで水に慣れ親しむことや、もぐる・浮くなどの経験を通して、十分に呼吸の仕方を身に付けておくことが大切である。」とあり、高学年で始まる「クロール」「平泳ぎ」の指導に向け、低学年及び中学年での運動(遊び)を通して水に慣れること、呼吸の仕方を身に付けることが求められていることが分かる。

呼吸の仕方について「小学校解説」では、低学年の「息を止めたり吐いたりしながら」から中学年では「呼吸を調整しながら」となり、質的な変化を窺うことができる。高学年においても、「基本的な技能」として「呼吸動作」が含まれているが、これは泳法での呼吸動作と見てよかろう。高木(2018)⁷⁾は、手足の動作が優れていたとしても、呼吸動作が適切に行えなければ、泳ぎの継続や習得が困難であると指摘していることから、呼吸動作は低学年及び中学年で段階的に身に付けた上で、高学年の学習につなげることが望まれよう。

また、中学校では、泳法の習得が主な学習活動

となり、「背泳ぎ」「バタフライ」も含め、第3学年では、効率的に泳ぐことが求められる。泳法の習得に欠かせない浮力、呼吸、推進の3つの技術の習得は、小学校低学年及び中学年で学びが礎となることから、中学校での水泳の学習を見据えて、それらの動きや技能をしっかりと身に付けさせることが望まれよう。

3-2-5. ボール運動系

ボール運動系で身に付ける技能は、「ボール操作」及び「ボールを持たないときの動き」の2つである。「ボール操作」の系統性は低学年の「簡単なボール操作」から始まり、「基本的なボール操作」、「ボール操作」、「基本的なボールや用具、バット操作」と続く。また、「ボールを持たない時の動き」も「攻めや守りの動き」から始まり、「ボールを持たない時の動き」、「ボールを持たない時の動き」、「仲間と連携した動き」、「仲間と連携」と続く。このように、「ボール操作」及び「ボールを持たない時の動き」は、小学校低学年から中学校まで学びが継続していくことがわかる。

なお、中学年より「ネット型」「ゴール型」「ベースボール型」の3つの型に分かれるが、この「ボール操作」及び「ボールを持たない時の動き」は、それぞれの「型」によって異なる説明がなされている。また、低学年でのボールゲームには、中学年からの3つの型に発展できるようなゲームの例示がみられることから、「ボール操作」及び「ボールを持たない時の動き」は、小学校低学年から中学校第3学年までそれぞれの「型」に応じて継続的且つ、段階的に展開していくことがわかる。

ボール運動系では、上述の2つの技能を用いてゲーム(攻防)を行うことがねらいとされている。このゲームは「易しいゲーム」から「簡易化されたゲーム」、「攻防」、「ゲーム」と展開していき、学年進行と共にゲームの難易度も上がっていく。先の2つの技能を高めつつ、ゲーム(攻防)のレベルも段階的に上げていくことが求められることがわかる。

ところで、「小学校解説」には「ベースボール型」は「学校の実態に応じて取り扱わないことができる」とある。事実、大田ら(2022)²⁾は、小学校教

員の約30%が「ベースボール型」を実施していないことを指摘しており、実施率は高いとは言えない状況にある。一方で「中学校解説」では、「実施にあたり、十分な広さの運動場の確保が難しい場合は指導方法を工夫して行うこと」と説明されており、「ベースボール型」は行う方向で位置付けられていることがわかる。中学校での「ベースボール型」では、「ボール操作」「ボールを持たない時の動き」に加えて「バット操作」も求められる。仮に小学校で「ベースボール型」の授業が未実施の場合、それに関わる技能を中学校での学習で習得することになる。中学校での学びを考慮し、系統的学習の観点から考えると、小学校においても、グラウンドや用具、ルール等を工夫して「ベースボール型」を実施する必要があると考えられる。

3-2-6. 武道系

前述のように、武道系は唯一、中学校初出の運動領域である。中学校での学習の系統性を見ると、中学校第1学年及び第2学年から中学校第3学年まで通して、「基本動作」及び「基本となる技」を身に付けることとある。これは「初出」に拠るものと理解される。そして、第3学年でこれらを用いて攻防することが求められる。ここに、武道の学習の到達点が「攻防」で、これを行うために「基本動作」及び「基本となる技」の習得が促されるという構図が浮かび上がる。

武道では、「基本となる技」「相手の技」というような形で「技」が表記されている。「中学校解説」の第3学年では、「技を高め」といった表記も見られる。したがって、第3学年の「基本となる技」は第1学年及び第2学年で身に付けた技を高めていくものと理解される。なお、「相手の技」は攻防の中で出現する用語となる。攻防については、第1学年及び第2学年では「簡易な攻防」を、第3学年で「攻防」となり、攻防の難易度が変化していくことが理解できる。

ところで、この武道領域で示される「基本動作」や「基本となる技」は、「中学校解説」に例示されている柔道及び剣道、相撲においてそれぞれ異なることが分かる。例えば、第1学年及び第2学

年での柔道の「基本動作」は「相手の動きに応じて行う姿勢と組み方、身体動作、崩しと体さばき及び受け身のことである」とある。また、「基本となる技」は「投げ技の基本となる技と固め技の基本となる技のことである」とある。したがって、武道におけるこれらの「基本動作」や「基本となる技」は運動種目ごとに異なり、「武道」としての「基本動作」,「基本となる技」ではないことを理解しておく必要がある。ただし、本来的には「武道」としてのこれらを学習し、その上に各種の運動固有の動作や技を学習するといった構成が求められるべきではなからうか。このことは今後の課題としておきたい。

さて、武道領域では他の運動領域のように「○○遊び」といった導入的な運動が無く、直接核心に入っていくこと³⁾や指導内容の多さに比して学習期間が短いことが課題として指摘されている⁴⁾。このような背景のもと、小学校で武道を導入しようとする取り組みが見られる。その1つの例として、「体づくり運動」で武道を行うことが挙げられる。例えば、西本ら(2023)¹⁰⁾は剣道を小学校6年生の体づくり運動で実施し、剣道の基本技能や攻防の楽しみを実感させることができたことを報告している。このように、体づくり運動を活用し小学校で武道の導入を図ることは、小中連携的な視点に立つと歓迎されるものであると推察される。しかし、体づくり運動の目的は、体をほぐしたり、多様な動きを作ったり、体力を高めたりすることである。このような立場からすると、体づくり運動で武道に関わる基本技能を身に付けさせることが妥当かどうかは今後議論が必要になるだろう。

なお、「小学校解説」には、体づくり運動の「多様な動きをつくる運動」で「押し合はずもう」が、「体の動きを高める運動」で「すもう」といった例示が見られる。ここで「すもう」に取り組む場合であっても、目的は多様な動きを作ることや体の動きを高めることであり、「相撲」の基本技能を身に付けることではないことに留意しておきたい。しかし、小学校で「すもう」を経験し、その楽しさを体感させることは、小中連携の視点からすれば有用となると考える。

3-2-7. 表現運動系

系統性(図14)を概観すると、「表現(遊び)」と「創作ダンス」、「リズムダンス(遊び)」と「現代的なリズムのダンス」、「フォークダンス」は、それぞれ小学校から中学校にかけて系統性が確認できる。各種の系統性は以下のようになる。

「表現(遊び)」及び「創作ダンス」は、「題材(テーマ)の特徴を捉えて踊る」という特徴を持つ種目である。低学年の「身近な題材」から「身近な生活などの題材」、「いろいろな題材」、「多様なテーマ」、「表したいテーマ」と続く。また、小学校から中学校まで一貫して「即興的に踊る(表現)」ことが求められ、低学年の「そのものになりきって全身で即興的に踊る」から中学年及び高学年での「表したい感じをひと流れの動きで即興的に踊る」へ、中学校では「動きに変化をつけて即興的に表現」することへと発展する。また、高学年からは踊りの構成を工夫することも求められる。なお、高学年では「簡単なひとまとまりの動きにして踊る」から中学校では「変化のあるひとまとまりの表現」、「簡単な作品にまとめて踊る」へと発展する。

「リズムダンス(遊び)」及び「現代的なリズムのダンス」では、「リズムに乗って弾んで踊る」ことが特徴的な種目である。「踊り方」を見ると、小学校では「即興的に」踊ることが、中学校では「自由に」踊るとの記述がみられ、何か特定の動きを模倣するというような形態ではなく、児童・生徒の即興的に自由に踊ることが求められる。また、中学校では、第1学年及び第2学年で「変化のある動きを組み合わせる」、第3学年では「変化とまとまりをつけて」という表記が加わり、学習内容に発展が見られる。

「フォークダンス」は、「日本の民謡や外国の踊り方の特徴を捉えて踊る」ことが特徴となり、他のダンスのように即興性や自由性は求められず、このような踊りの特徴を捉えて踊る学習となる。高学年は「基本的なステップや動きを身に付ける」、中学校では「特徴的なステップや動きと組み方で踊る」となり、高学年では日本の民謡や外国の踊りの「基本的なステップ」及び「基本的な動き」の習得が目指され、中学校では、より踊り

の特徴を捉えて踊ることが求められる。また、「フォークダンス」では「みんなで踊って交流して楽しむこと」が求められており、踊りの特徴を捉えつつ、それらを通して交流し楽しむことが求められる。以上のところから、表現運動系では、それぞれに異なった特徴があり、その系統性を捉えた指導が求められると言えよう。

ところで、小学校では「表現運動」の発表の場を運動会とし、運動会で行うダンスを「表現運動」の代わりとしたり、「表現運動」を運動会のためだけに行ったりする実態が報告されている^{9),14)}。一般的に、運動会で行われるダンスには、パターンとしての模範の「動作」があったり、一部の児童・生徒や教員が創り上げたパターンがあったりして、その模範となるパターンを児童が習得して踊るといったような構図が浮かび上がる。その場合、前述した3つの能力のうち、「即興的に表現する能力」をこのような形で養うことは難しいことが予想される。「即興的に表現する能力」について、小学校では低学年の「表現遊び」「リズム遊び」から見られ、中学校では「創作ダンス」においても必要とされる能力である。表現運動やダンスを学習するにあたっての重要な能力の一つであると言えよう。したがって、小学校において表現運動の学習をする際には、何かに代替させるのではなく、授業としてしっかりとしていく必要があると考えられる。また、小中の連携的視点からすれば、他の運動領域と同様に、系統図にも示されたような流れを持って指導していく必要があると考える。

5. まとめ

本研究では、体育・保健体育科において、各運動領域の特性を踏まえながら、学年間、校種間の系統性について、小中連携という観点から、主に技能面に着目し、小学校から中学校にかけての学びを円滑に接続するための方策について考察を行った。ここで、今一度、ここまでの考察を俯瞰すると、およそ次のようにまとめることができる。

まず体づくり運動では、「体ほぐしの運動(遊び)」は、小・中学校で一貫して「心と体の変化

に気付くこと」,「仲間と関わり合うこと」がねらいとなる。「多様な動きをつくる運動(遊び)」及び「体の動きを高めるための運動」,「実生活に生かす運動の計画」は,多様な動きの獲得から体の動きの向上,さらにそれを自己の目的に適した形で実行できるようになることが求められる。

器械運動系は,動きや技ができる楽しさや喜びを味わう運動であるため,それらを習得できるようにすることが主な学習となる。低学年では「器械運動」に関わる基礎的な運動感覚を身に付けることが,中学年は「基本的な技」のより確実な定着が望まれる。高学年及び中学校では,技のレベルアップ並びに技の組み合わせ(演技)が求められる。

陸上運動系では,低学年及び中学年は「陸上運動」につながる「基本的な動き」及び「基本的な技能」を定着させ,走ったり跳んだりすること自体の楽しさを味わわせることが重要となる。高学年及び中学校では,身に付けた技能を発展させ,より専門的な動きの習得が目指されると共に,それらを通じて記録の向上を目指したり,競走(争)したりすることの楽しさを味わわせることになる。

水泳運動系では,低学年及び中学年は,まずは水に慣れること,呼吸の仕方を身に付けることが求められる。高学年以降は泳法の学習が始まる。泳法の習得には浮力,呼吸,推進の技術が求められることから,低学年及び中学年でそれらの技能をしっかりと身に付けることが望まれる。

ボール運動系では,小学校から中学校にかけて「ボール操作」及び「ボールを持たないときの動き」をそれぞれの「型」に応じて継続的且つ段階的に身に付けさせるような展開となる。また,これら2つの技能を用いてゲーム(攻防)をすることが学習のねらいとなるため,そのレベルも段階的に高めていくことが求められる。

武道系では,中学校初出の運動領域であるため,まずは「基本動作」及び「基本的な技」の習得が求められる。更に,それらの技能を用いて「攻防」をすることが学習の到達点となる。第3学年では,2つの技能及び攻防の難易度を高めていくことが望まれる。

表現運動系では,低学年及び中学年は「即興

的に表現する能力」及び「リズムに乗って踊る能力」,「コミュニケーション能力」を培うことが求められる。この3つの能力は,高学年以降の各種ダンスの学習でそれぞれ求められており,それぞれのダンス特性を踏まえた系統的な指導が求められる。

このように,段階的に学習を進め,学年間及び校種間での学習の接続を円滑にするためには,各運動領域の系統性に加えて,運動特性についても理解する必要があることが明らかになった。すなわち,運動特性を理解した上での運動技能等の系統性をみていく必要があるということである。

本研究では,体育・保健体育科の学びの体系化を図式化することで,系統立てた指導の在り方を示すことができた。今後は,より現場の実態に即した形での体育・保健体育科の小中連携,一貫教育の在り方について研究を進めていきたいと考えている。

なお,著者 MK は研究の概念化,研究計画の立案,系統図の作成,論文原稿の草稿・執筆を担当した。著者 JK は,論文原稿を批判的にレビューし,修正し,投稿を承認した。

参考文献

- 1) 石塚諭・稲葉裕紀「体育授業における小中連携教育の現状と教師の意識」『北関東体育学研究 6 45-54』(2021)
- 2) 大田穂・小出真奈美・岩間圭祐・鈴木由香・木塚朝博「小学校体育におけるベースボール型授業の実施状況とその課題」『体育科教育学研究 38(2) 13-25』(2022)
- 3) 加藤純一「小中連携からみる体育・保健体育のあり方について—運動領域の系統性を中心に—」『文教大学教育学部紀要 第49集 133-153』(2015)
- 4) 黒澤寛己・横山勝彦「『武道』領域における系統学習の導入政策:体育科教育をめぐる政策アクターの分析を視点に」『同志社スポーツ健康科学 9号 9-18』(2017)
- 5) 窪田陸人・丸山剛史・平野智之・川島芳昭・

- 遠藤忠「『持久走』概念及び『持久走』教育実践に関する覚書」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 第32号 231-238』(2009)
- 6) 杉原隆「運動指導の心理学 運動学習とモチベーションからの接近」『大修館書店』(2003) 142-154頁
- 7) 高木英樹「ヒトの泳能力を制限・規定する要因」『体育の科学 68(8) 591-596』(2018)
- 8) 高橋健夫・岡出実則・友添秀則・岩田靖「新版 体育科教育学入門」『大修館書店』(2010) 27頁
- 9) 寺山由美「『表現運動』を指導する際の困難さについて—千葉県小学校教員の調査から—」『千葉大学教育学部研究紀要 第55巻 179-185』(2007)
- 10) 西本浩章・長尾真一・山口あずさ・曾我部敦介・木原資裕「小学校体育授業における対人的ゲームとしての剣道：スポーツチャンバラの用具を用いた授業展開」『武道学研究56-1(1) 49-58』(2023)
- 11) 長谷川晃一・平田佳弘・黒川隆志「学校体育における器械運動実施上の問題点に関する調査研究—中学校保健体育科教員への面接調査を通して—」『環太平洋大学研究紀要 11 161-170』(2017)
- 12) 平川譲「なぜ体育に関心を持ってない教師が多いのか」『体育科教育 第61巻 第8号 10-12』(2013)
- 13) 三輪佳見・野邊麻衣子・高橋武大・西田英司・高橋祥朗・馴松郁美・日高正博「小学校体育で育成すべきベースボール型ゲームの技能について—中学校との連携による目標設定と授業改善—」『宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要 第25号 105-117』(2017)
- 14) 宮川則子「表現運動の学習指導における諸問題」『上田女子短期大学紀要 第18号 45-55』(1995)
- 15) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 体育編」(2018)
- 16) 文部科学省「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引き」(2016)
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afldfile/2019/08/29/1369749_1.pdf
- 17) 文部科学省「小中連携, 一貫教育に関する主な意見等の整理」(2012)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/045/houkoku/1325182.htm
- 18) 文部科学省「中学校学習指導要領解説 保健体育編」(2018)
- 19) 湯浅晃「武道における『わざ』の概念について：明治期剣道関係文献にみられる技術用語について」『天理大学学报34(4) 127-141』(1983)
- 20) 四方田健二「小学校の体育授業支援を担うコーディネーター教員の取り組み事例」『名古屋学院大学教職センター年報 第6号 53-65』(2022)

A Study of Education in Cooperation between Elementary School and Junior High School in Physical Education

— Based on Activity Characteristics and System of Sport Competence —

KASAHARA Maaya · KATO Junichi

Abstract

Since 2016, a system of integrated elementary and junior high school education, spanning nine years of compulsory education, has been implemented, which has subsequently led to the establishment of compulsory education schools. At the time, concerns were raised regarding the lack of a smooth transition from elementary school to junior high school, which came to be known as the “first-year junior high gap.” The Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology is said to have introduced this system in an effort to address these concerns and make some improvements. To achieve integrated education, elementary and junior high school teachers and staff are expected to understand the nine-year learning process and offer educational guidance to their students accordingly. This is true for all subjects, including physical and health education. However, in physical and health education, disparities in the acquisition of motor skills have been observed among different types of schools, which make establishing motor skills difficult to achieve. Therefore, this study focused on the motor skill aspects in each motor domain in physical and health education. By schematizing these aspects, the study demonstrates the systematization of learning and discusses the systematic approach to teaching.

Keywords: physical education, System, Cooperation between elementary school and junior high school, integrated elementary and junior high school education, Sport competence

